

大橋正和 教授

マルチメディア応用技術、プロセスマネージメント、
情報技術と社会システム、FLPジャーナリズムプログラム

多様な専門を 横断的に学ぶことにより コーディネーターの 能力を修得

パソコン創世記からスーパーコンピュータのかたわらにいて、まるで趣味のように
ネットワークの研究をしてきたという大橋先生。
IT技術を通して21世紀の社会のあり方を模索しながら、
多様な専門教員がひしめく学際学部を牽引してきた
大橋先生の言葉は、新時代を担う確かな人材を
世に送り出してきたという自負に満ち溢れていた。

新学部の設立に 携わった縁で理工学部から 移籍してきた変わり種

子どものころ、体が弱かった大橋先生。中高生のときは進学校に在籍していながら、学校に通うのもままならないほどだったという。

「両親も、私は長生きできないだろうと感じていたのか、『大学では好きなことをやりなさい』と言ってくれたので、ライフサイクルの長いものを求めて理工学部の土木工学科に入学しました。建築で100年残るものはなかなかないけど土木なら――

と、今考えると、きわめて単純な発想だったのですね。大学に入学すると、ある先生から、『体が弱いなら実学は厳しいから理論のほうに進んでみてはどうか』とアドバイスを受けたので、流体力学の勉強を始めました。水の乱流の発生過程などという極めて理学的なテーマについて研究していたので、土木工学科では異色の存在だったと思います。そのうち土木工学科での研究に限界を感じたので、卒業後は迷わず数学科へ編入学。今までの場所とカルチャーがまるで違っていたので苦労しましたが、この2年の間に現在専門として

いるIT系の研究の礎を築くことができました」

その後の大学院では土木に戻り、修了後は数学科の教員になったという変わり種の大橋先生。パソコン創世記と呼ばれる70年代からスーパーコンピュータやネットワークの研究を続けてきた実績が買われ、学外でも省庁ネットワークのガイドライン作成を手がけるなど、IT界の第一人者としての地位を築きあげてきた。「いろんな形のITネットワークに関する実践研究を重ねていた折、新学部設立の機運が高まり、理工学部代表の準備委員になりました。そこ

で自分なりに一生懸命草案を作ったところ、これだけアイデアを出したのだから移籍しろ、という話になりました……」

かくして、土木工学科と数学科を行ったり来たりしていた大橋先生は、総合政策学部という新しいステージで教鞭を執ることになったのである。

法や政策なども視野に入れながら社会のなかにITを組み込んでいく



大橋 正和 (おおはし まさかず)

東京都生まれ。1976年中央大学理工学部土木工学科卒業。1978年中央大学理工学部数学科卒業。1983年中央大学大学院理工学研究科土木工学専攻博士後期課程修了。専門は情報技術。

大橋先生の専門は情報化による社会システムの研究。90年代以降、大きく変わりつつある社会において、ITやネットワークを用いた社会貢献を目的としている。

「直接の研究テーマとしては、電子政府や電子自治体、電子入札、電子調達などがあげられます。ですが学外では国連における電子システムの

標準化に取り組んでいますし、国の電子契約の制度を決める委員にも選ばれているので、単にITの技術的な部分だけではなく、社会の仕組みを視野にとらえた研究をしているかと考えています」

社会のなかにITを組み込んでいくためには、ITに関する知識だけではバランスや、公平性を欠くこと

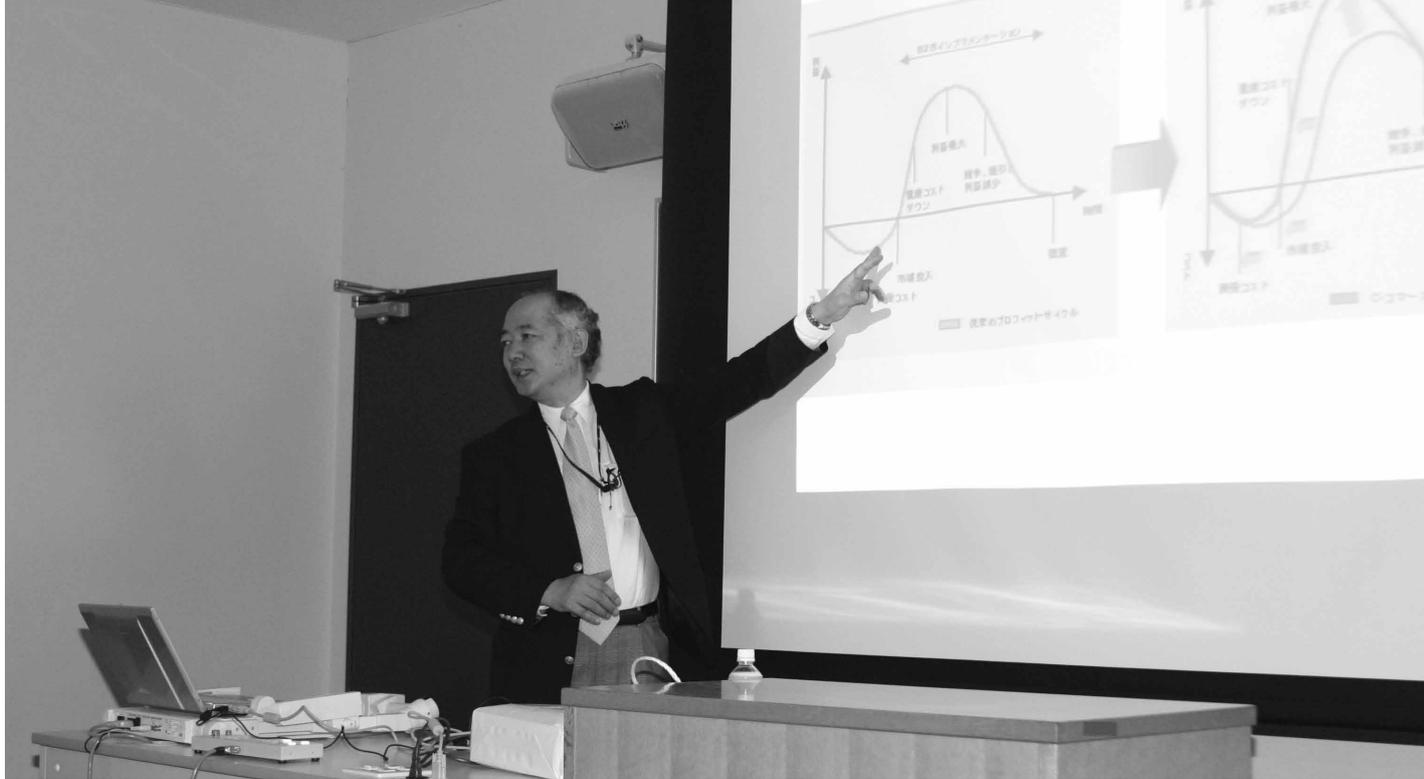
になる。国家全体を見渡した制度設計や法律、政策的な判断なども含めた総合的な取り組みが必要なのだと、大橋先生は語る。

「20世紀と現在とを比較すると、多くの面で社会が変容を遂げていることに気がつきます。社会の構造的な部分ももちろんですが、人々の意識も明らかに変わりました。例えば「豊かさ」の概念について考えてみましょう。わずか20年ほど前には、ほとんどの日本人は大量生産されたものを購入し、大量に消費することこそが「豊かさ」であると信じていたのです。今の学生には、まるで思いも寄らないことでしょうか……。最近十数年で私たちの価値観は大きく変化しましたが、それを前提として21世紀の社会がどうあるべきかを考えていくと、まだハッキリしない部分が大半を占めています。そこで、ネットワークなどを含めた新しい仕組みを使って、ITを武器にしながら21世紀の方向性を考えていこうというのが、私の抱いているテーマなのです」



大橋先生の講義を真剣に聴く学生の皆さん。メモをとり、講義内容を理解しようという姿勢がわかる。

現在、東アジアでは急速な経済発展が認められている。だが、その発展プロセスが果たして、かつて日本がたどった道と同じであってよいのか？——大橋先生は現代社会のあり方に鋭い視線を投げかける。そしてITやネットワークといった自分の専門分野を介しながら、よりよい未来社会を実現に導く道筋を探し続け



わかりやすい言葉で、高度な授業を展開していく大橋先生。学生が自覚を持って新しいものに挑戦していく姿勢を大切にしている。

ているのだ。

「例えば、電子政府をつくる場合には、"シチズンセントリック" の概念を掲げるよう心がけています。日本語に訳すと"市民中心主義"ですね。行政のしくみや考えを基に電子化を行って市民にサービスを供給するのではなく、市民の望むことに対応して行政がよりよいサービスを提供するために、その橋渡し役として電子政府を構築するという発想です。ITを社会のなかに組み込み、根付かせていくプロセスのなかで、"シチズンセントリック"

の考え方も定着させていきたい。それも私の務めだと考えています」

複数の専門分野を横断的に学び、リーダーの資質を習得して欲しい

一人の研究者として社会貢献をめざしている大橋先生だが、総合政策学部での教育者としての顔も持っている。

「そもそも総合大学というのは、世の中にあるさまざまな要素を細かく分けて研究していく機関であり、そこで得られた成果を積み重ねていくと社会を規定できるということを前提として成り立っていたわけです。ところが実際の世の中は非常に複雑で、多くの専門研究を積み重ねるだけでは必ずしも社会に尽くせないことがわかってきました。そこで、多様な専門を横断的に扱う学際的な学部が誕生したのです。

法学部では法律、経済学部では経済のスペシャリストを養成してお

り、それはそれで大きな強みだと思っています。しかし実際に社会を見渡してみると、企業が何らかのプロジェクトを成功させるために必要なのは、法律や経済の深い専門知識より、法律と経済の関係をきちんと把握する能力なのです。いろいろな学問を垣根を越えて学べる学部、それが総合政策学部なのです」

総合政策学部では、当初からいろいろなプロジェクトのリーダーを務められる人材の育成を目標としてきたと、大橋先生は言う。事実、卒業生にはプロジェクトのまとめ役として活躍している人も少なくないようだ。

「二期生に大手酒類販売企業に就職した学生がいるのですが、彼は現在30代そこそこで新規事業部の部長となり、フランスで新しいリキュール会社やシャトーを買収するときの責任者を務めています。先日会う機会があったのですが、彼は実感を込めて『総合政策学部を出てよかった』と言っていました。というのも、そういうプロジェクトの際には弁護士や公認会計士、専門のコンサルタ



最新機器を使ったハイテク授業を展開していく大橋先生。

ントなどいろいろな職業の人の専門知識をまとめあげなくてはならないから。それぞれのしくみについて全部知っていないければ、プロジェクトリーダーは務まらないというのです。

総合政策学部の学生のなかには、弁護士や公認会計士を目指す人も決して少なくありませんが、むしろそういった専門的な人材をとりまとめ

るコーディネーターのような立場を目指す人に、最適な学部なのかもしれません」

新しい分野に チャレンジする強い意欲が 求められている

総合政策学部では学生に対し、卒業後の進路を明確に示してはいない。それは逆の見方をすれば、学生自身のキャリアデザイン次第でどんな職業も目指せることの証でもある。

「通常の学部では考えにくいことですが、私たちの学部では毎年、国家公務員一種に合格する学生もいれば公認会計士の資格を取る人もいるし、ロースクールから弁護士を目指すケースもみられます。キャリアを獲得するために必要な勉強を直接学べるわけではありませんが、学生自身が自分の目指すものを見つけて、自分でできれば、その目標に向けて自らカリキュラムを組める環境は整っているのです。自立して方向性さえ示

せれば、私たちもできる限りのアシストをして、非常に高い確率で実現させることができると考えています」

このような環境で自分の進路を切り拓いた学生は、企業の人事担当者からも受けが良いという。勉強の幅が広く、新しい分野に積極的にチャレンジする姿勢が評価されるからだ。「私たちはよく、ダブルメジャー」という言葉を使うのですが、これからの社会で活躍するためには一つの専門にとどまらず、多様な知識や経験を積むことが必ず役に立ちます。

大学に法学部がないアメリカのように、日本でもいろいろな分野からロースクールを出て社会に羽ばたいていくシステムが定着すればいい。実際、本学部からロースクールに合格した学生のなかにも、中国史やフランス言語学ゼミの出身者がいます。総合政策学部は所属する教員の出身からして法学部あり、経済学部あり、理工学部ありと実に多様。学生の皆さんには、このような人材環境を存分に活かして欲しいですね」

自立し、将来のビジョンを持って

積極的に学ぶ姿勢が求められる総合政策学部。学生にはどんな資質が求められているのだろうか。

「高校まで Education だった教育が大学以降 Learning へとカタチを変える、学生に必要なのは3つのスキルです。1つ目は専門知識を取得する能力、2つ目は新しい知識を創造する能力、そして3つ目が、新しいものにチャレンジする意欲です。大学の勉強では、必ずしも解答が出るとは限りません。どうしても答えが出せず、挫折感を味わうこともあるでしょう。そんなとき、めげずに前進して挫折を乗り越えていくためには、旺盛なチャレンジ精神が欠かせません。

現在のような変化の激しい時代では、常に新しいものにチャレンジしていかなければなりません。そこで新たな問題を発見し解決に導くスキルは、教科書にも載っていないければ、大学で教わることもできないのです。だからこそ、学生一人ひとりが日々自覚を持って行動し、卒業までに身につけて欲しいと願っています」